

# 求められるパティヴラター（妻の夫に対する貞節さ） とその実態

—ラーニー・サティー女神崇拝を事例として—

相川愛美

## 0. はじめに

本稿では、サティー (*satī*) 女神崇拝、特にラーニー・サティー (*Rāṇī Satī*) 女神を信仰する女性信者を通して、不均衡な社会構造の中で生きる女性信者の宗教実践の実態や宗教的観念について探ろうとするものである。

現代インドにおいて、寡婦殉死した女性を女神として祀るサティー寺院が各地に存在する。各サティー寺院の本尊はサティーになった女性で、その女神はその女神と同じ出身のカーストや氏族集団によって祀られ、その氏族の守護神とみなされている。一方で、これらのサティー女神は汎ヒンドゥー教的なドゥルガー (*Durgā*) 女神の化身、あるいは宇宙の最高女性原理であるシャクティ (*śakti*) の顕現とも考えられ、女神と同族でない人々もまれに信仰している。

本稿で扱うラーニー・サティー女神は、伝承によると、アグルワール (*Agrwāl*) に帰属するバンサル (*Bansala*) 氏族に属し、13世紀に戦死した夫の遺体とともに寡婦殉死した。その後、彼女は女神化し、現在ではバンサル氏族を中心とした一部のアグルワールの人々によって崇拝されている。ラーニー・サティー信仰の信者が主な教本として使用するのは、ラマーカーント・シャルマー氏 (*Ramākānta Śarmā*) の小冊子『シュリー・ラーニーに帰命 シュリー・ラーニー・サティーの安寧 シュリー・ナーラーヤニーの行いの湖<sup>1</sup>』であり、ラーニー・サティー女神の縁起譚が書かれている。その後、彼の弟子であるハルゴーヴィンド・ムラールカー氏 (*Haragovinda Murārakā*) が、韻文体で書かれたシャルマー作の行伝をより多くの人々に知ってもらうために、詠みやすい散文体で書いた『不死なる幸福な女性 不死なる勇敢な女性 サティーの第一人者 シュリー・ラーニー・サティー・ダーディー・ジーの不滅の生涯の物語<sup>2</sup>』を2001年に出版した。さらにその2ヶ月後、彼は、この信仰の理解をより深めるために問答形式で書いた指導書『真実の輝き<sup>3</sup>』を出版

1 *Śrī Nārāyaṇī Carita Mānasa*

2 *Amara Suhāgana, Amara Vīrāṅganā, Satī Śīromaṇī, Śrī Rāṇī Satī Dādījī kī Amara Jīvana Kathā*

3 *Sat kī Jyota*

した。

ムラールカー氏著の小冊子において、彼はパティヴラター (*pativrātā* 夫に貞節な妻) の重要性を強調する。パティヴラターとは、一般的に妻が夫に対して貞操を守り、誠実に尽くすことを意味し、妻は夫に対してパティヴラターであること、それが理想の妻であると解釈されている。

ラーニー・サティー崇拜においても、女性信者に対してパティヴラターの重要性を説いており、妻は夫に対して奉仕精神をもち、毎朝夫の御足に触れる、そのような妻は、真実の境地を得た者“サティー”であり、自分の家系の名を高め、死後に夫とともに天界に住むことができると考えられている。

このラーニー・サティー女神は一部のコミュニティの氏族女神ということで、寺院には主に限られたコミュニティが参拝し、それらの参拝者は家族連れが多くみられる。年に2回開催される例大祭では、インドの各地域からラージャスターン州 (Rājasthān) ジュンジュヌー (Jhunjhūnū) 県に所在する最も大きいラーニー・サティー寺院に赴き、家族の繁栄と安寧を祈願する。

一方で、この信仰の宗教的活動は女性が主体であり、特に地元の活動ではキールタン (*kīrtan* 集団による宗教歌謡) が積極的に行われている。キールタン活動には既婚女性のみが参加でき、この空間には、キールタンが終わりを迎えるころに夫婦で行うプージャー (*pūjā* ヒンドゥー教の神像礼拝の様式に則して行われる礼拝儀式) を除いて、男性は入ることが許されない。筆者がラーニー・サティー崇拜において、宗教的活動を行っているのは主に女性であると聞き取りをしたとき、疑問が生じたのをよく覚えている<sup>4</sup>。なぜなら、寺院における運営や司祭、教本を書くのは男性の役割であるが、中心的な活動を担っているのは女性である。また、教本にはパティヴラターの重要性について言及され、それは男性的視点である。そのため、本稿では寡婦殉死した女性を氏神として信仰する女性信者を事例に、彼女たちが考えるパティヴラターとは何か、また彼女たちにとっての信仰とは何かを考察する。

## 1. パティヴラター

パティヴラターの解釈は、インド古法典であるダルマシャーストラ (*Dharma-Śāstra*) においても言及がされてきた。それらの古法典には、妻がパティヴラターとしてどのように振舞うのか具体的に示されており、夫に対しての献身的な行為によって、妻は夫を満足させることができ、この世で名声を得、また解脱ができるという内容である<sup>5</sup>。インドの歴史において、ヒンドゥー教が議論の対象とされた場合、ダルマシャーストラから正しい

4 2013年10月7日 筆者による聞き取り

解釈を求めていた。それは、19世紀のサティー（寡婦殉死）の慣行を廃止へと導くためのサティー論争<sup>6</sup>においても、イギリス人たちはダルマシャーストラにおけるサティーの言及に依拠した。何百年に渡って書かれてきたダルマシャーストラは19世紀においてもなお、権威を放っていたわけである。それは現代においても、人々によってダルマシャーストラの記述内容は、伝統、正統性を強調させるためしばしば使われることがある。

また、インドのラージャスターン州においていくつかの政権をうちたてた尚武の種族ラージプート (Rājput) 族にとってパティヴラターの考えは、サティーの観念を遵守する中で、代々重要な観念として受け継がれてきた<sup>7</sup>。ラージャスターン州のラージプート族は伝統として男性は安全を守ること、女性は貞節であることに対するの責任感を持ち、ラージプート族の男性は伝統的に自分たちの領土を拡大することで、彼らの血筋を繁栄させていき、その際に戦死することが彼らにとっての最も名誉なことであると考えられている。またラージプート族は“犠牲”に対する信念が強く、自らの人生は戦いのために犠牲になることが義務であるとされてきた。そして、彼らの象徴的な総括が戦いで死ぬ *saka* (the cutting down) であった。今日では *saka* はカーストアイデンティティ、個人的誠実さという力強い象徴にとどまっているが、彼らにとって犠牲というのは自然的傾向であり不可欠な教訓である<sup>8</sup>。そして女性は夫を献身的に支えていくこと、また家族のため、夫の家族のため、親族のため、友達のために専念すること（パティヴラターであること）が人生における犠牲であり、そして最高の犠牲はサティーになることであると考えられている<sup>9</sup>。インド独立1947年以降はインド政府が活発に活動を開始し圧倒的な力を見せ始めたため、ラージプート族は政治的権力を失い、彼らの生活は一気に変わった。彼らが求める領土拡大のため英雄を生み出す戦いはなくなり、名誉であると考えられている戦場で死ぬことも現代においてはなくなってしまった。しかし、実質的な行為をなすことはなくなっても、ラージプート族は先祖の過去の武勇伝を語りつぎ自分たちラージプート族の観

5 主に生活規範や法規定が記された『ヤージュニャヴァルキヤ法典』(Yājñavalkya-smṛti) 87 偈では、夫を喜ばせる女性が名声を獲得すると述べる。それに対する注釈書『ミタークシャラー』(Mītākṣarā) では、夫に対して喜ばしく有益なことに専心することが妻にとっての良き振る舞いであると解釈し、さらに具体的な女性の良き振る舞いを述べ、それが結婚後の女性のすべての義務であると言及する。詳しくは [相川 2016a] を参照。

6 [Mani 1998] は、19世紀のインド植民地における寡婦殉死についての討論がどのように展開されていったかを示した研究であり、大いに参考にさせていただいた。Mani氏は19世紀におけるサティーの論争はエリート男性による議題となるが、その論争において女性の訴えや声は全くないと家父長制を強く批判している。

7 ラージプート族の女性に関する先行研究は Lindsey Harlan氏があげられる。彼女の研究はラージプート族における血族の構成や、彼らの守護神である *kuldevī*、またラージプート族の女性と *satīmātā* の関係などを現地調査によって分析されている。また、Kumkum Sangari氏と Sudesh Vaid氏によって、現代におけるラージャスターン州のサティー考察がなされている。

8 [Harlan 1992: 122]

9 [Harlan 1992: 120-124]

念を現在でも根強く受け継いでいる。女性においても同様に、現在でもパティヴラターの観念は受け継がれ、依然としてパティヴラターであることの条件であるパルダの習慣も残っている。女性たちは公共の場に出ることを極力避け、公共の寺院に行くことは少なく、宗教的フェスティバルの参加も控えている。これらの習慣も現代においては幾分緩和されてはいるが、ラージプート族の観念は男性と同じように、女性も自分たちの部族のプライドを持ち伝統を守り続けている<sup>10</sup>。

[Major 2007]によると、パティヴラターは自分の夫を3つの方法で守る。一つ目は夫に仕えることである。これは夫の義務遂行のために個人的なニーズに応えることや、夫を励ますことである<sup>11</sup>。例えば、夫が戦いに行く際に、戦いに対して恐怖を抱くことや、妻と離れることが嫌で戦いに行くのをためらう夫に対して、戦へ向かわせるようにするパティヴラターの話はラージプート族間で多く見られる<sup>12</sup>。2つ目は夫、子供に食事を提供し面倒をみることであり、そして、もう一つの方法は断食やプージャー、巡礼をすることによって女神を喜ばせ夫を守ることである。もし、夫が死ねばそれは妻の力量不足と判断され、周囲から非難される。その際に妻は夫の死についていくこと（サティーになること）でこの非難から逃れることができるのである。

ラージプートの女性にとってパティヴラターであることは良き妻としての理想であるとされ、それを求められ、彼女自身も努めている。妻が夫に対して貞節であれば夫は健康で社会においても成功し、反対に夫に対して貞節でない妻は夫の活力を吸収し、最終的に夫は死んでしまうと考えられている。つまり、夫を死から守るためにはパティヴラターの義務がとても重要になる。

## 2. サティー寺院と氏族女神サティー

サティー寺院とはサティー（寡婦殉死）をした女性を女神として祀る寺院であり、その女神は同じカーストや氏族集団によって祀られ、その氏族集団の守護神としてみなされている。これらの寺院は私的寺院が多く、特にインドのラージャスターン州に多く点在し、そのコミュニティの大部分がアグルワール・カーストである<sup>13</sup>。このカーストは18 (17.5)の氏族 (*gotra* 伝説的に始祖に連なる仮想血統)に分かれており、各氏族からさらに家系(リネージ)が支派する。例えば、サティー寺院において最も有名な寺院はラージャス

10 [中谷 1995] では、ラージプート族女性の宗教的慣行を行為者の視点から分析し、女性主体の女性観について考察をしている。

11 [Major 2007: 119]

12 Hari Rani は妻と離れるのが寂しくて、妻に何か形見になるようなものが欲しいと要求したところ彼女は自分の頭を剣で切り、その剣と自分の頭を夫に渡した。夫は妻の頭を馬の鞍につけ、妻への未練を断ち切り勇敢に戦へ向かった。[Harlan 1992: 160-172]

13 ラージャスターン州のシェーカーワティー (Śekhāwāṭī) 地域に多くサティー寺院が点在しており、筆者の2013年の実地調査によると、65寺院のうち40寺院がアグルワール・カーストであった。詳しくは [Aikawa 2020] を参照。

ターン州のジュンジュヌー県に所在するラーニー・サティー寺院である。この寺院はアグルワール、バンサル氏族、ジャーラン (Jalan) 家系が運営している。この寺院の女神ラーニー・サティー女神は、13世紀に寡婦殉死した女性ナーラーヤニー・デーヴィー (Nārāyaṇī Devī) であり、彼女はバンサル氏族ジャーラン家系に属していたことから、同氏族の女神としてみなされている。また縁起譚において、ナーラーヤニー・デーヴィーは、夫が敵に殺されたときドゥルガー女神の化身であるチャンディー (Caṇḍī) の姿となり敵を一撃で倒したことから、ヒンドゥー教におけるドゥルガー女神と同一視されている。そのため、本尊はドゥルガー女神の表象から、宇宙最高の女性原理であるシャクティの顕現である三叉戟 (*triśūl*) であり、人々はそれに対して崇拜をしている<sup>14</sup>。

氏族女神 (*kuldevī*) は、ヒンディー語で、*kul-* 氏族、*devī-* 女神で、いわゆる氏族の守護神である。これはラージプート族においても、主要な守護者とみなされている。彼らの氏族女神は、決定的なポイントで、守護が必要なラージプート族の集団の前に化身して現れ、彼らを救う。彼女は、主に戦いにおいて勝利をもたらす女神であり、勝利によって氏族の繁栄をもたらす。さらに彼女は、家族にこれから起こるべく不吉なことを警告することもあり、女性に対しては子宝に恵まれるようにもたらす。

この氏族女神は基本的に戦いを好み、ラージプート族の男性にとって領土拡大と戦死することが名誉であると考えられている。一方、女性はパティヴラターであることによって夫を守るということが義務つけられている。しかし、お互いの義務や名誉を成就させるには矛盾が生じる。夫の目的達成をしようとすれば、妻のパティヴラターの考えをくじくことになり、これは必然的に氏族女神の機能も否定せざるをえない。しかし、現在における氏族女神のイメージは昔のイメージとは異なり歴史的な氏族女神との結びつきは薄くなり、比較的ドメスティック傾向が強くなっている。それは氏族女神の好戦的なイメージが消えるというわけではなく、現在においても氏族女神は家の守護神として、時には夫を守る者としてラージプート族の主要な守護神されている<sup>15</sup>。

ラージプートにとって、氏族女神はウチの領域 (家庭の保護) とソトの領域 (戦場における勝利) において守る守護神と理解されており、主に公共において崇拜される。一方で、サティー女神は精神的領域で家庭において崇拜されている。サティー女神は、吉兆な女性、夫への献身さというイメージを持ち、ラージプート族の女性にとって、自身の自己犠牲が美德で、夫が死んだ際に妻が夫の遺体とともに生きたまま茶毘に付されるサティー (寡婦殉死) は、最高の自己犠牲である。

アグルワールによって崇拜されているサティー女神とは、このラージプート族の家系の繁栄を導く氏族女神と、英雄的なアイデアである伝統としてのサティーの2つのコンセプト

14 [相川 2016b: 7]

15 [Harlan1992]

トを積極的にとり入れ、サティー（寡婦殉死）をした女性が氏族女神となったと考えられる<sup>16</sup>。このような過程から、アグルワールの氏族女神におけるサティー崇拜は、夫へ献身さ、つまりパティヴラターが強調されている。

サティー寺院を運営しているアグルワールは、マールワーリー (Mārwarī) であり、彼らは 19 世紀をはじめとして、ラージャスターン州から主にカルカッタ (現コルカタ) やデリー、ボンベイ (現ムンバイ) などにインド各地に移住した商人である。移住先の大都市で、コミュニティのネットワークを駆使し、経済的に成功を収めた彼らは、巨額の富を得、まもなく故郷ラージャスターン州へ投資を始める。それは、公共施設や教育施設、そして装飾建造物ハヴェーリー (*havelī*) 邸宅など投資は多岐にわたった<sup>17</sup>。さらに、故郷の発展や教育水準の向上などを目的にトラストを結成していった<sup>18</sup>。土地とつながりを持たないマールワーリーにとって、故郷への建造物建築などの投資行為自体がその場所とつながりを示すようになった<sup>19</sup>。サティー寺院も同様で、故郷ラージャスターン州に同族の氏族女神を祀る寺院を建築することで、故郷とのつながりを表象し、氏族の守護神を共有するもの同士で同郷意識を共有する機会を与えている<sup>20</sup>。

[田中 2014] の冒頭において、彼はマールワーリーによる寺院運営と信仰の結びつきについて説明する難しさを述べている。なぜなら、「なぜ、マールワーリーは寺院運営を行うのか。」という田中氏の疑問に対し、「信仰がゆえに行う」というマールワーリーの回答は、世俗的な慈善活動のイメージを持つ社会貢献が、直接的な信仰理由にはならないからだと考える。それゆえ、[田中 2014] では、「信仰」と極力距離を取りながらマールワーリーによる寺院運営について歴史的、そしてコミュニティの構築について考察を行っている<sup>21</sup>。

寺院運営とサティー崇拜という視点から、[田中 2014] が言及するように、マールワーリーによる「信仰」とは何かを説明することは難しい。しかし、コミュニティ集団（寺院運営）とは離れ、個人（寺院に参拝する人々）にとってのサティー崇拜に着目した場合、彼ら/彼女らにとっての「信仰」が見えてくる。筆者は、研究を進めていく中で、そもそも氏族女神は崇拜するものなのか、という疑問を抱く機会をもらった。

しかし、ここで強調しておくべきことは、ラーニー・サティー崇拜は、氏族女神だから崇拜するという理由だけではなく、人から人へ布教がなされているということである。例

16 [Hardgrove 2004: 256]

17 [中谷 2013]

18 [Varmā 1987]

19 [中谷 2013: 160-163]

20 [Hardgrove 2004: 251]

21 [田中 2014: 4-5]

として、すべてのアグルワールのバンサル氏族がラーニー・サティー女神を信仰しているわけではない。信者の中には、バンサル氏族に嫁いでから、親戚からラーニー・サティー女神のキールタン活動について聞き、一緒に参加してみても初めて氏族女神の存在を知り、さらにメンバー同士で信仰体験談を聞き、自分自身で実践してみても功德体験をすることで信心深くなっていく者もいる。このように、ラーニー・サティー崇拜には、人に信仰を勧め、共感し信仰を始めてみるという経緯が存在する。そして、ラーニー・サティー崇拜の場合は、宗教的活動において女性が主体となって活動をしている。このような場合、女性信者にとっては氏族女神を超えて、崇拜対象になっていることもある。

一方、サティー寺院運営は男性が主体である。ラーニー・サティー寺院のように、トラストを結成し頑丈な組織体制を持ち運営することもあれば、他の氏族のトラストは同じアグルワールであるが、彼らは自身の氏族のルーツを詳しく知らず、サティー寺院を通して、氏族女神を知る場合もある。例えば、アグルワール・ジンダラ (Jindala) 氏族ケムカー (Khemakā) 家系のサティー寺院では、自身の氏族のルーツや、サティー女神についてよく理解しておらず、小冊子において自身の家系についての情報提供を求めている<sup>22</sup>。また、バンサル氏族のポッドハール (Poddhāra) 家系は、マードラ (Mādala) 女神が氏族女神であるが、それをよく理解しておらず、同じ氏族のジャーラーン家系のラーニー・サティー女神に礼拝する人がいるため、自身の氏族女神に礼拝をするように警鐘している<sup>23</sup>。では、男性は個人レベルで宗教的活動を行っているのか。ラーニー・サティー崇拜における男性は、ローカルレベルのキールタン活動は参加しないが、記念祭などの宗教的行事は参加する者はいる。また、寺院参拝や自宅での礼拝のみ行う者など、これらは個人の信仰心の差であるといえる。

### 3. 小冊子におけるパティヴラター

ラーニー・サティー崇拜において、主に2冊の小冊子が信者によって知られている。1975年にまとめられたラマーカント・シャルマー氏による『シュリー・ラーニーに帰命 シュリー・ラーニー・サティーの安寧 シュリー・ナーラーヤニーの行いの湖』は、ラーニー・サティー女神の縁起譚が韻文体で書かれている。シャルマー氏は1937年生まれで、現マハーラーシュトラ州出身である。彼の父親はブラーフマンであり、サティー女神を氏神とするコミュニティではないが、母親がラーニー・サティー女神を崇拜していた。シャルマー氏の伝承によると、夢に現れたラーニー・サティーがヒンディー語で行伝を書くように指示したことから、先行するナーラーヤニー・デーヴィーの聖人伝を参考に

22 Jaya Śrī Khemakā Śakti Saṅgha, *Śrī Khemakā Śakti Cālīsā*, Jaya Śrī Khemakā Śakti Saṅgha, n.d. Jaya Śrī Khemakā Śakti Saṅgha, *Śrī Śakti Vandana*, Jaya Śrī Khemakā Śakti Saṅgha, 2008.

23 Śrī Poddhāra Mādala Bhavānī Samiti Guwahāṭī (collecting), *Śrī Mādala Bhavānī Carita Mānasa, Maṅgala Pāṭha*. Śrī Poddhāra Mādala Bhavānī Samiti Guwahāṭī, 1980.

書き上げた。現在においても、サティー崇拜におけるキールタン（集団での宗教歌謡）で、この縁起譚を使用している<sup>24</sup>。その後、弟子のハルゴーヴィンド・ムラールカー氏が、韻文体で書かれたシャルマー作の行伝をより多くの人々に知ってもらうために詠みやすい散文体で、小冊子『不死なる幸福な女性 不死なる勇敢な女性 サティーの第一人者 シュリー・ラーニー・サティー・ダーディー・ジーの不滅の生涯の物語』を2001年に出版した。さらにその2ヶ月後に、信仰理解を深めるための指導書『真実の輝き』を出版した。

ラーニー・サティー女神の縁起譚の概要は、ラーニー・サティー女神であるナーラーヤニー・デーヴィーが夫に貞節であることで積むことができる真実の力（*sat*）で、様々な場面においてその力を発揮している。そして、物語の終盤では彼女は、自分自身が積んだ真実の力でサティーになり、ナーラーヤニー・デーヴィーがヒンドゥー教において理想的な女性であり、超越的な存在を持つ女神であることが描写されている。

縁起譚に続いて、小冊子には供養作法や観想マントラ、そして特別な日など読者に知ってもらいたい内容が記述されている。そして、『真実の輝き』を含めて、小冊子には女性の貞節さについて記述されており、妻の夫に対する献身さの重要性を説いている。

ムラールカー氏は、サティーとは女性が社会によって与えられた最高の称号と考え、夫への忠節である女性がサティーであると位置づける。さらに、以下の特徴を持つ者が理想の女性であり、そのようであることが推奨されている。

#### （パティヴラターの女性の特徴）

- ・自分の夫に対して、真心をもって、そして奉仕精神をもって、毎日早朝に自分の夫の御足に触れる女性は、夫に貞節な女性。
- ・夫に忠節な女性の顔は輝きがある。その顔は牛の顔のようである。
- ・彼女は全身美しい。彼女の身体全体は均整がとれている。つまり本当に痩せているわけでも、太っているわけでもない。
- ・無病である。
- ・目が大きい。
- ・性格は愛に満ち、他人に対して優しい。
- ・行為と行状は高潔である。
- ・誰かを憎んだり喧嘩したりしない。
- ・家庭内において、社会において、そして自分の夫に対して真心を持っている。
- ・年長を尊敬し、年下たちを好いている。

24 サルミネン氏 [Salminen 2006] はラーニー・サティー聖者伝について研究している。また、縁起譚についての詳細は [相川 2015] を参照されたい。



- ・ 姑舅を両親と思って世話をしている。
- ・ 自分の息子をよく教育する。

また、パティヴラターの振る舞いの具体例を以下のように示す。

- ・ 貞節な女性とは、毎日自分の夫の御足に触れ、そして、夫に対して奉仕の念に満ち、真摯でなければならない。
- ・ 自分の夫をグルとして、導く人として受け入れ、他の男を自分のグルとしない。
- ・ 自分の夫に対して誠意を持ち続けており、大変な尊敬の気持ちで夫への奉仕に専念する。
- ・ 真実の境地（サティー）を得た女性は自分の家系の名を高め自ら望む死をして、夫とともに天界に永遠に住めると言及する。

ムラールカー氏は、夫を最高神と考え、夫に対して奉仕を行うことを妻に推奨し、離婚する原因は女性の愛欲によるものであり、それを制御できない女性は、夫に対して誠心を持たないためであると考えている。そしてそれはヴェーダの伝統であり、真に夫に貞節な女性は自分の生涯で無類な苦勞に耐えなければならないと結論付けている。

この小冊子において、妻はパティヴラターであることを求めているが、一方で男性については、どうあるべきかという言及は特段にされておらず、女性へのメッセージ性がとても強い。ここで、男性が考える理想の妻という像というものが明確に表されたといえる。

#### 4. 調査の概要

調査対象：ラーニー・サティー女神を崇拝するコルカタ在住のサティー崇拝者 /  
サティー寺院参拝者

調査場所：ラーニー・サティー寺院 / K 地区  
信者の自宅 / K 地区

調査期間：2012年7月25日－30日（6日）  
2012年8月12日－17日（6日）  
2013年10月4日－11日（7日）  
2014年11月5日－10日（6日） 計25日間

調査方法：インタビュー形式、(31人：うち1人男性/1時間程度)

事前に20項目の質問を準備し、それ以外は自由に話をしてもうことで聞き取り調査を行った。言語は主にヒンディー語、英語で、ベンガル語話者においてはヒンディー語で通訳してもらいながら聞き取りを行った。

聞き取り調査の結果において、30人の女性の平均年齢は41歳である。うち11人が年齢については無回答だったこともあるが、概ね40代から50代の女性が多い。結婚について、出生と結婚年を教えてくれた女性たちの結婚平均年齢は22歳で、ほとんどの女性が高校卒業後すぐに結婚しているケースが多い。30人のうち、8人はアグルワールではなく、彼女たちがサティー寺院に参拝する理由として、近所に寺院がある、またはサティー女神はドゥルガー女神の化身だからという回答であった。彼女たちはサティー女神をアグルワールの氏族女神として考えておらず、気に留めないで参拝している点は興味深い。

ラーニー・サティーを氏族の女神と考えない女性たちを除いた、アグルワールの女性について着目すると、彼女たちは、結婚する前、もしくは結婚後バンサル氏族に属している。彼女たちはカースト内婚、氏族外婚でのお見合いが通常であり、アグルワールにはそれぞれの氏族、家系で氏族女神が存在する。そして、彼女たちは婚姻時に婚家の守護神を受け入れることが期待され<sup>25</sup>、アグルワールによるラーニー・サティー女神女性信者たちの場合、5通りの解決方法がみられた。

- 1) 婚家の守護神としてラーニー・サティー女神を受け入れ信仰する。
- 2) 生家と婚家の守護神の両方を受け入れ信仰する。
- 3) 彼女自身が信仰の優先順位を決めて信仰する。
- 4) 生家の氏族の女神を結婚後も優先的に継続して信仰する。
- 5) 生家と婚家の守護神の両方をドゥルガー女神と同一視、もしくはシャクティの顕現と認識して、それぞれを同等とみなしている。

上記の方法によって、生家と婚家の氏族女神信仰の緊張関係を緩和しており、アグルワールにおける氏族女神の関係性は柔軟で自由度が高いことがわかった<sup>26</sup>。

彼女たちの主な宗教的活動についての項目は以下のものである。

#### 1) 毎朝夕の自宅での礼拝

信者の自宅にはラーニー・サティーの祭壇があり、祭壇の中心にはラーニー・サ

25 ハーラン氏によるラージプート研究によって、生家と婚家の氏族女神の関係性が示される。ラージプート女性にとって婚家の氏族女神の礼拝は絶対であるが、彼女たちにとっては婚前に礼拝していた生家の氏族女神も大事な存在である。そこで、ラージプート族の女性たちは、氏族女神信仰における実践的礼拝行為について3通りの方法①婚家の氏族女神を優先的に礼拝し、次に生家の氏族女神を礼拝する。②婚家と生家の氏族女神を汎ヒンドゥー教的なドゥルガー女神と同一視することで両女神の本質を同一視する。③彼女の心の中で彼女自身の守護神を選択することによって氏族女神信仰において生じる緊張関係を緩和している [Harlan 1992]。

26 詳細は [相川 2015] を参照されたい。

ティー女神の本尊が安置されている。朝夕に、チャーリーサー (*cālīsā*) という 40 行からなるヒンディー語の韻文『シュリー・ナーラーヤニー・チャリット・マーナス』を読誦する。

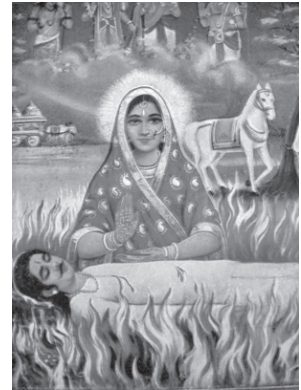
聞き取り調査からわかったことは、[図 1] からみると自宅における礼拝は 2 極化に分かれているということである。まず、約 7 割の女性 (17 人) は毎日自宅で礼拝をしているが、約 2 割 (4 人) の女性は礼拝を行っていないという結果だった。尚、礼拝は時々するなどの回答は得られなかった<sup>27</sup>。自宅における祭壇について、ラーニー・サティーの本尊は、ヒンドゥー教のシヴァ神と関係するトリシュール (三叉戟) に目がついているのが特徴的である [写真 1]<sup>28</sup>。シヴァとシャクティの永遠の結合の象徴であると考えられ、貞節な既婚女性は女神シャクティの具現化であると解釈している。この本尊を中心にして、ヒンドゥー教の神々の絵、ナーラーヤニー・デーヴィーが夫の遺体とおもにサティー (寡婦殉死する) 絵を沿え、周囲を装飾する [写真 2.3]<sup>29</sup>。



[写真 1]



[写真 2]

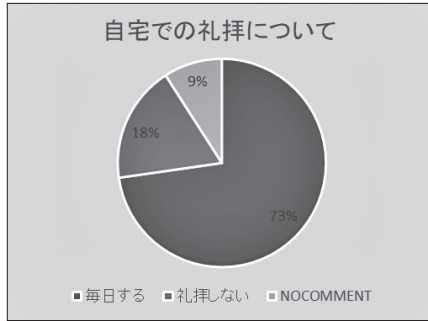


[写真 3]

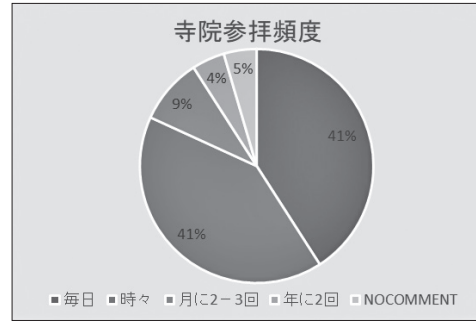
27 この質問において、これは家に祭壇があるかどうか、家族の理解があるかどうかという背景も考慮しなければならないが、今回の調査においては残念ながらこれ以上の情報の聞き取りはできなかった。

28 2013 年 11 月 7 日筆者撮影

29 2013 年 10 月 7 日筆者撮影、於 H アグルワール宅



【図 1】



【図 2】

## 2) サティー寺院参拝

コルカタにおいて、ラーニー・サティー寺院は 2 箇所ある。

- ・ K 地区
- ・ R 地区

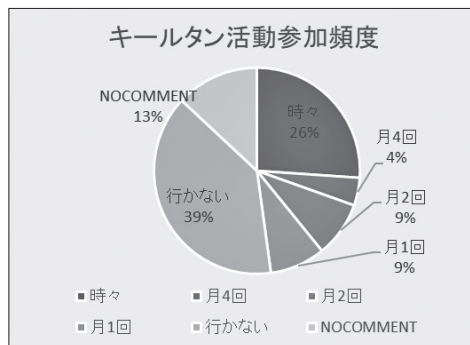
寺院参拝頻度に関して「毎日」と答えた女性は 41% となり、また「時々」も 41% という結果になった [図 2]。この回答の背景として、特に毎日と答えた女性たちはおおむね近所に住んでいることが多い。K 地区の寺院は、住宅地域の中にあり、夕方女性一人で出歩いたとしても比較的 안전한地域である。また、この地域はベンガル人が住むエリアということで、サティー女神はドゥルガー女神の化身、シャクティ崇拝と考えると、寺院参拝をしに来ている。ラーニー・サティー寺院には家族の繁栄と安寧を祈ることから家族同伴で参拝する傾向が多いが、K 地区における参拝者は、女性一人で参拝しに来ることもまれではなく、これは地域性が出ている。一方、R 地区は、バザール内に所在するということもあり、家族連れで寺院参拝する。また、参拝頻度で「時々」と答えた女性のその理由については、自宅からオートリクシャーなどで 15 分以内ほどの距離に住んでいるからなどという現実的な理由がみられた。月に 2-3 回という回答については、休みの時などを利用して、家族と参拝するからということであった。またその他の理由として、自宅で礼拝をしているからそれで十分だと考える信者も見られた。

## 3) キールタン活動

ラーニー・サティー崇拝では、キールタン活動が積極的に行われている。ローカルレベルで行われるキールタン活動は、基本的には既婚女性が参加対象で、男性や未婚の女性は対象ではない。月に 1-2 回、信者の自宅で開催され、最低 13 人のメンバーが必要とされている。キールタン活動の基本的な流れは、ラーニー・サティー女神の

経本の読誦、アールティー (ārtī 燈明を点した手燭をもって神像に向かって立ち、手燭を聖音オームの字形に做って揺らす)、そして最後にプージャーとなる。時間はおよそ3時間程度でこの間は中断することは不可とされている。

聞き取り調査から、キールタン活動の参加頻度は「時々」という回答が26%であった<sup>30</sup>。大体キールタン活動は月に1-2回の開催であり、それ以上のキールタンの参加の場合、他の地区のキールタングループに参加すれば多くの参加が可能となる。キールタン活動は、彼女たちがラーニー・サティー崇拝を知るきっかけとなることが多い。前述したように、アグルワールのカーストにおいても、すべての家族が自身の氏族の女神を知っているわけではなく、またバンサル氏族(ジャーラン家系)の全員がラーニー・サティーを氏族の女神として崇拝しているわけではない。バンサル氏族に嫁いってから、親戚からラーニー・サティー女神のキールタン活動について聞き、一緒に参加してみるというようなケースである。ラーニー・サティー崇拝の信者の中では、文字を読むことが苦手な女性も少なくないので、主に信者はキールタンを通して、ラーニー・サティー女神の縁起譚を知って感動をしたり、キールタンが終わったあとに、メンバー同士で体験談を聞き、自分自身も実践して功德体験をすることで信心深くなっていく<sup>31</sup>。一方で、「行かない」という回答も約4割を占める。その理由としては、未婚の女性も含んでいることもあげられるが、寺院参拝と同様に自宅で礼拝をしているからそれで十分だと考える信者もいた。



[図3]



[写真4] 例大祭時期のラーニー・サティー寺院(ジュンジュヌー県) 2012/8/16  
筆者撮影

30 「時々」というのはインタビュアーからの直接回答であり、実質何回という定義はしていない。

31 2013年10月7日 筆者による聞き取り

4) ラージヤスターン州ジュンジュヌー県所在のラーニー・サティー寺院への巡礼<sup>32</sup>

ラーニー・サティー寺院では年に2回例大祭が行われている。バードラパダ月 (Bhādrapada 8月下旬から9月上旬) の黒分第15日<sup>33</sup>とマールガシールシャ月 (Mārgaśīrṣa 11月下旬から12月上旬) の黒分第9日である。バードラパダ月に開催される例大祭<sup>34</sup>は盛大に開催され、各サティー寺院では装飾などがなされ、各地域から人々が参拝しに集まる。その中でもジュンジュヌー県ラーニー・サティー寺院の規模は大きく、ラーニー・サティー信者たちは例大祭時期になると各地から集まる<sup>35</sup>。

## 5) ヴラタ (vrata: 願掛けのための節食)

ラーニー・サティー崇拜における女性信者たちは、通常、月の白分と黒分第12日目に行い、一日一食の食事をする。尚、節食時にチャイや水を飲むことは可能である。ある地元地域のラーニー・サティー信者グループ内では、この月に2回のヴラタをグループ内担当制にして、個人の実質的な回数を減らして、お互いの日常生活における負担を減らす方法である。それだけではなく、この方法によって、グループ内における相互作用で信者間のヴラタに対するモチベーションを高める効果がある。このヴラタの他、年に1度だけ24時間行うものや、ドゥルガー女神と同一視されていることから、ディワリー時期に行うものもある。

## 5. パティヴラターであること

3章において、ラーニー・サティー崇拜における小冊子を書いたムラールカー氏によって、良き妻の特徴が示された。女性信者たちはこの点についてどのように考えているのか。筆者は、インタビューした30人の意見内容を「献身的であるべき」「家庭内役割」「意識していない」「無回答」の4つに分類した [図4]。

「献身的であるべき」と答えた女性の内容では、パティヴラターの考えについて、よいと考え、夫は神だから、夫の食事の準備をしなければならない。もっとも大事なことは、夫、家族、子供を支えという意見で、夫を神と同等として認めている旨の解釈がみられた<sup>36</sup>。続いて、約2割の女性は、パティヴラターを「家庭内役割」と考えている。具体的

32 近年はコルカタからジュンジュヌーのサティー寺院へ行くことは費用や時間的に厳しいという理由から、A地区 (Odisha) へ行く機会が増えている。ここはジュンジュヌー県のラーニー・サティー寺院を縮小したような寺院で非常に似ているという。2013年10月7日 筆者の聞き取り調査による。於Hアグルワール宅。

33 太陰暦月の日付けに使用される。満月から新月までのかけていく期間を黒分 (Kṛṣṇa-pakṣa) といい、新月から満月までの満ちていく時期を白分 (Sukla-pakṣa) という。

34 バードラパダ月に開催される例大祭は、ラーニー・サティー女神であるナーラーヤニー・デーヴィーから数えて13人目のシーター・サティー (Sītā Satī) がサティー (寡婦殉死) をした記念したことに由来する [Census 1961: 86-87]。一方、マールガシールシャ月の例大祭は、ナーラーヤニー・デーヴィーが寡婦殉死した日 (1295年12月6日) に由来する [Murāraka 2001a]。

35 コルカタ、デリー、ムンバイ、バンガロールなど主要都市を中心に各地域から参拝に来る。

な内容として、妻は夫が喫煙、飲酒などしないようにコントロールする、妻が夫の世話、親族の世話をし、子供の教育をする。他には、自分が未亡人にならないように夫をサポートするという、自身の生活を守るために必要なことであると考えている女性もいたが、主に夫は外で稼ぎ、妻は家を守るという考えが強調された内容であった。

あるキールタン活動終了後の団欒において、ある女性が「(祈ることの) 一番はやっぱり夫よ。だって、夫に先に死なれたらどうなるの？もう家庭は崩壊よ。仕事もないし、子供もいるのに私たちはどうやって生きていけばいいのかわからない。(私は) 夫より先に死ぬことを望むわ。だから(私は) ダーディー(ラーニー・サティ)に祈るの。」と筆者に話した<sup>37</sup>。彼女たちの大半は高校を卒業後、すぐに結婚し専業主婦となった。アグルワールのマールワリーは保守的で基本的には、女性が外で働くことは快く思っていないことが多い。そのため結婚後、彼女たちは家を守ることを期待される。また、働く経験がない彼女たちにとって、自分が稼ぐという選択肢はなく、男は「ソト」、女は「ウチ」という役割分担がはっきりと示されている。つまりパティヴラターであることは、妻という役割に専念しながら、現実的な金銭問題(夫の稼ぎ)、夫の死後についての不安から、夫の健康や、仕事がうまくいくようにサポートする意味合いがみられた。

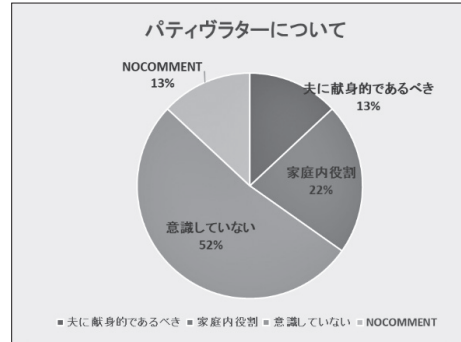
そして、約半数の女性が「意識していない」という結果であった。その理由として、寡婦だから、未婚だから対象者がおらず、彼女たちにとってパティヴラターは関係ないという意見だった。「パティヴラターが一番大事であることはないわ。私は今寡婦だけど信仰しているわよ。」と話す女性は、家庭問題が生じているときに兄嫁に紹介されて信仰を始めた。彼女にとって、ラーニー・サティ女神を深く信仰しているからこそ、キールタン活動なども参加している<sup>38</sup>。つまり、ラーニー・サティ女神に対する信仰が一番大事であり、パティヴラターは関係ないということである。

以上から見てみると、ムラールカー氏が示すパティヴラターに対して女性信者たちは気に留めているとは、はっきりとは言えない結果となった。

36 このような回答の背景として、筆者(外部)に対してのバイアスがかかった可能性もあると考える。ラーニー・サティ崇拝において小冊子が掲げる理想像をイメージしながら回答してくれた可能性も考慮しなければならない。

37 2013年10月7日 筆者による聞き取り

38 2013年10月7日 筆者による聞き取り



【図4】

## 6. 考察

Sudesh Vaid 氏と Kumkum Sangari 氏は、サティー（寡婦殉死）を最も暴力的な家父長制の習慣であり、サティー寺院はそのイデオロギーを作り出す装置であると痛烈な批判をしている<sup>39</sup>。しかし一方で Hardgrove 氏は、サティー寺院における文化的な意味の考察が不足であると指摘し、サティー崇拜におけるコミュニティ形成の考察を行っている<sup>40</sup>。[川橋・田中 2007] は、宗教学とジェンダー学の視点から、いままでの宗教学は、信仰する人間の実践の立場に立ち、人間中心の学問を標榜しつつも、実際はその人間の半分を占める女性の声を無視し、男性中心の価値観に基づいて宗教についての資料を収集し、かつ男性的な視点から宗教の理解を目指してきたと従来の宗教学に対して、ジェンダーやセクシュアリティの視点が欠けていることを指摘している。そしてその原因として、宗教学は比較の視点から、価値中立的かつ客観的に宗教を理解しようとし、この客観性の規範こそが、ジェンダー視点の欠落を生み出したと指摘する<sup>41</sup>。

様々な宗教において、聖職者の役割は男性によって占めることが多い。その理由として、女性は男性の聖性を脅かす劣ったものとみなされ<sup>42</sup>、その結果、女性の価値は低くみなされ、宗教における女性の活躍の可能性が狭まり<sup>43</sup>、そしてその宗教における伝統や教義、思想などによって、男女間の差異を固定化し、差別の形成と現状維持をさせているということを [川橋・田中 2007] は指摘する。

ラーニー・サティー崇拜のコンセプトとして家父長制の要素があることは事実である。女性の行動範囲の制限、例えば、夫が働いている間だけ、キールタン活動のために外出してもよい女性や、祖父母や子供の世話などで家を空けることは許されず、キールタンに参加しない（できない）女性、または、女性が一人で外出するのを快くないと思っている家

39 [Sangari & Vaid 1991]

40 [Hardgrove 2004]

41 [田中・川橋 2007: 4]

42 [田中・川橋 2007]

43 [田中・川橋 2007]



族環境のため外出しない女性がいて、彼女たちは家父長制の空間で可能な限りの活動を行っている。しかし、一見、女性が制度的に抑圧され、常に劣位におかれているように見える社会ではあるが、すべての女性たちが何も言えない主体というわけではない。著者が調査を通じてわかったことは、女性信者たちは、自分自身の信仰心から宗教的活動を行い、自分自身なりのパティヴラターを実践しているということである。それはムラールカー氏が言及するような、夫を神と同一し、夫のために奉仕の精神をもつようなパティヴラターであるとしても、それを解きほぐして見ると、ソトで稼ぐ役割を持つ夫を支え、家庭を守るウチの役割として見ていることもある。女性たちの祈りは、家族を守るため、家族安寧のための祈りであり、それは金銭問題や物欲、理想のイメージを求めるなど現実的で具体的な祈りである。そこには、信者が信仰心の大切さを1番に考え、信仰において女性信者と氏族女神の関係性の強さが感じられる。その点から、ムラールカー氏が示す理想像パティヴラターと実際の女性信者が見せるパティヴラターは同じとは言えない。彼女たちの姿は、信仰における規則（理想）と信念（現実）を取捨選択しながら、女性たちは自らの状況に働きかけながら、周囲との社会関係を切り結んでいこうとしている<sup>44</sup>とも言えるのではないだろうか。

※この論文は2015年に開催された南アジア学会において発表し、様々なご意見をいただいた内容を参考に執筆したものである。

---

44 [松尾 2016:164]

聞き取り調査結果

調査結果	生年月日	結婚前/ ゴートラ	結婚前/ カースト	結婚前/ ゴートラ	結婚前/ カースト	結婚後/ ゴートラ	結婚後/ カースト	結婚年	学歴	職歴	結婚前/ クルデ-ガイ-	結婚後/ クルデ-ガイ-	崇拝歴	寺院参拝	自宅 アージャ-	キールタン	パティヴラターについて	サチーについて	サチーについて	取材日	メモ
1 ♀	1983/4/24	Agrwal	Gal	Agrwal	Bansal	Bansal	Agrwal	1983/6/20	High School	なし	Sakamr Mata	Rani Sati	生まれたときから	毎日	毎日	時々	よい。夫は博。そのため、夫はの真事の権威をしなければならぬ。	まったく別	No comment	2012/8/16	
2 ♀	1958/7/9	Agrwal	Bansal	Agrwal	Bindal	Bindal	Agrwal	1982/6/20	High School	なし	Durga	Rani Sati	1977年から	月に1.2度	毎日	月一回	良い。夫も、子供を愛すること。	Rani Satiは自身のシャクテイの力でサチーになっただけ。	No comment	2012/8/16	
3 ♀	1966/7/3	Agrwal	Bansal	Agrwal	Poddar	Poddar	Agrwal	1988/7/10	High School	なし	Rani Sati	Madal Sati	生まれたときから	月2回	毎朝	時々	サ-プの意味。妻は夫が喫煙、飲酒などしないようにコントロールする。親族の世話をする。親族の世話。子供の教育。妻は夫を尊敬すべき。	まったく別物。Rani Satiは、常に周囲から尊敬を得たために信仰	No comment	2012/8/16	
4 ♀	1959/5/29	Agrwal	Goyal	Agrwal	Bansal	Bansal	Agrwal	1979/11/28	High School	なし	Sakamr Mata	Rani Sati	生まれたときから	ジュンジュースモ-に年23回	毎朝	週一回	夫をサ-プ-トサ-プ-さ。夫をサ-プ-	まったく別物。Rani Satiは、シャクテイ。	No comment	2012/8/16	ラーニー・サチー-寺院運営者の妻
5 ♀	1970/11/25	Agrwal	Goyal	Agrwal	Bansal	Bansal	Agrwal	-----	Collage	夫の仕事手伝う	Kalka Mata	Rani Sati	15年ほど前から	時々	毎日	月2回	自分が宋亡人にならないうように守るため。男が外でお金を稼ぐから。世の中はお金が大事。だから夫をサ-プ-トサ-プ-	まったく別物。大事なのは、Rani Satiの慈悲、寡婦様々な信仰体験を持つ。	No comment	2013/10/7	
6 ♀	1958年	Agrwal	Gal	Agrwal	Goyal	Goyal	Agrwal	1983年	High School	なし	Kathusyam	Rani Sati	結婚後	時々	毎日	月2回	-----	信仰体験が大事	2014/11/4	現在も阿育王信仰	
7 ♂	1956/8/11	Agrwal	Bansal	Agrwal	Bansal	Bansal	Agrwal	1971年	-----	あり	Rani Sati	Rani Sati	生まれたときから	時々	毎日	参加しない	意識していない	シャクテイを崇拝。パワ-をくれる。	2014/11/4	No.7妻	
8 ♀	No comment	Agrwal	Bindal	Agrwal	Bansal	Bansal	Agrwal	1971年	High School	なし	Dholi Sati	Rani Sati	結婚後	時々	毎日	時々	No comment	No comment	2014/11/4	No.8夫	
9 ♀	1971/7/25	No Agrwal	-----	-----	-----	-----	-----	1992年	High School	なし	-----	-----	-----	月2回	しない	参加しない	意識していない	HinduのMnと同一。村に氏族のラーニー・サチーとしては信仰していない。	2014/11/4		
10 ♀	1975/6/18	No Agrwal	-----	-----	-----	-----	-----	1997/5/21	High School	なし	-----	-----	2013年から	毎日	しない	参加しない	意識していない	夫の病気をきっかけに信仰を始める。Mnはいつでも助けてくれる。	2014/11/4		
11 ♀	1959年	Bengali	-----	-----	-----	-----	-----	No marriage	No comment	No comment	-----	-----	毎日	毎日	時々	時々	意識していない	未婚。経済苦によって始める。近所。	2014/11/4		
12 ♀	1971/10/31	Agrwal	Gal	Agrwal	Bansal	Bansal	Agrwal	1993年	High School	なし	Chavo sati	Rani Sati	結婚後	毎朝	毎日	時々	夫にうそをつかない。夫について行く。	別物	人に必要ないい。心から信仰すればよい。	2014/11/4	二つの女神を同一視
13 ♀	1975/3/15	No Agrwal	-----	-----	-----	-----	-----	1996年	High School	なし	Durga	Karni Mata	生まれたときから	毎朝	毎日	参加しない	意識していない	Durgaだから信仰している。	2014/11/4		

調査結果	生年月日	結婚前/カースト	結婚前/ゴートラ	結婚後/カースト	結婚後/ゴートラ	結婚年	学歴	職業	結婚前/クルデーヴィー	結婚後/クルデーヴィー	崇拝歴	寺院参拝	自宅	ホームターン	パテリヴァクターについて	サティについて	信仰で大事なこと	取材日	メモ
14 ♀	1979年	Agrwal	Bansal	Agrwal	Bindal	2001年	High School	なし	Rani Sati	Dholi Sati	生まれたときから	毎日	毎日	No comment	意識していない		クル・デーヴィーを同一視	2014/11/4	
15 ♀	1978/10/27	Agrwal	Garg	Agrwal	Bansal	1999年	High School	なし	Hanumanji	Rani Sati	結婚後	毎日	毎日	参加しない	意識していない		Maはなんでも願いたいことをかなえてくれる	2014/11/4	
16 ♀	1982/4/7	Agrwal	Bansal	Agrwal	Gal	1982年	Collage	なし	Rani Sati	No comment	生まれたときから	毎日	毎日	月一回	意識していない			2014/11/4	
17 ♀	1960/9/27	Agrwal	Gal	Agrwal	Bansal	1982/5/1	High School	なし	Kediya Sati	Rani Sati	結婚後	毎日	毎日	参加しない	意識していない			2014/11/4	
18 ♀	No memory	No Agrwal	-----	-----	-----	大体50年前	No memory	なし	-----	-----	No memory	毎日	毎日	時々	意識していない			2014/11/4	昔から両親の影響で信仰
19 ♀	No comment	Agrwal	Bansal	Agrwal	Mitral	No comment	High School	なし	Rani Sati	Durga	幼少期から	時々	毎日	時々	意識していない			2014/11/4	
20 ♀	No comment	Agrwal	Singhal	Agrwal	Bansal	No comment	No comment	No comment	No comment	No comment	No comment	No comment	No comment	No comment	意識していない			2014/11/6	
21 ♀	No comment	Hindustani	-----	-----	-----	No comment	No comment		Durga, Kali	-----	幼少期から	毎日	しない	参加しない	意識していない		Maを信仰	2014/11/6	
22 ♀	No comment	Bengali	-----	-----	-----	No marriage	No comment	あり	Durga, Kali	-----	毎日	毎日	毎日	時々	お金なく結婚できません。関係なし。		Maを信仰	2014/11/6	
23 ♀	1996年	No comment	-----	-----	-----	No marriage	No comment	No comment	No comment	-----	5-6年前にコルカタに来てから	時々	しない	参加しない	未婚。関係しない。			2014/11/6	
24 ♀	12年生	Agrwal	Bansal	-----	-----	No marriage	Under Graduation	なし	Rani Sati	-----	生まれたときから	毎日	毎日	時々	未婚。関係していない、言及なし。		氏族の女神だから	2014/11/6	
25 ♀	1964年	Agrwal	Bansal	Agrwal	Goyal	No comment	High School	なし	Rani Sati	Loti Sati	生まれたときから	時々	No comment	No comment	意識していない			2014/11/6	
26 ♀	1988/2/22	Agrwal	Bansal	Agrwal	Goyal	2013/11/25	Graduation	なし	Siyam Baba	Rani Sati	結婚後	毎日	毎日	参加しない	意識していない			2014/11/6	婚家の女神であるため信仰。良き妻を見せる。
27 ♀	No comment	Bengali	-----	-----	-----	No comment	No comment	No comment	Durga	-----	生まれたときから	時々	しない	参加しない	意識していない			2014/11/6	Durgaだから信仰している。詳しくはわからない。
28 ♀	No comment	Agrwal	Goyal	Agwal	Gal	No comment	No comment	No comment	知らない	知らない	13歳ごろから両親の影響	時々	しない	参加しない	意識していない			2014/11/6	Dadiは、いろいろなミラクルを示してくる。救済者。
29 ♀	No comment	Agrwal	Bansal	Agrwal	Gal	widow	No comment	なし	Rani Sati	No comment	不妊などで困った時から	時々	しない	参加しない	意識していない			2014/11/6	Rani Satiに対する信仰が一番大事。信仰体験大事。パテリヴァクター関係なし。
30 ♀	No comment	Agrwal	No comment	Agrwal	Bansal	No comment	High School	なし	No comment	Rani Sati	子供のころから崇拝	毎日	毎日	参加しない	意識していない			2014/11/6	家に寺を作る
31 ♀	No comment	Agrwal	Bansal	-----	-----	No marriage	Graduation	あり	Rani Sati	-----	特別なときのみ	時々	しない	参加しない	意識していない			2014/11/6	未婚。単に氏族の女神だから。特別なこととはしない。結婚後も信仰はする。

注) Ma, DadiはRani Satiのこと

## 【参考文献】

## ヒンディー語文献

- [Agrvāla 2012] Svarājyamaṇi Agrvāla, *Agrasena, agroha, agrvAla*, Agroha Vikāsa Trust, 2012.
- [Jaya] Jaya Śrī Khemakā Śakti Saṅgha, *Śrī Khemakā Śakti Cālīsā*, Jaya Śrī Khemakā Śakti Saṅgha, n.d.
- [Jaya 2008] Jaya Śrī Khemakā Śakti Saṅgha, *Śrī Śakti Vandana*, Jaya Śrī Khemakā Śakti Saṅgha, 2008.
- [Murārakā 2001a] Haragovinda Murārakā, *Amara Suhāgana, Amara Vīrāṅganā, Satī Śiromaṇī, Śrī Rāṇī Satī Dādījī kī Amara Jīvana Kathā*, Śrī Rāṇī Satī Dādī Viśva Śānti Saṁsthāna, Nagpur, 2001.
- [Murārakā 2001b] Haragovinda Murārakā, *Satī kī Jyotā*, Śrī Rāṇī Satī Dādī Viśva Śānti Saṁsthāna, Nagpur, 2001.
- [Śrī Poddhāra Mādala Bhavānī Samiti 1980] Śrī Poddhāra Mādala Bhavānī Samiti Guwahāṭī (collecting), *Śrī Mādala Bhavānī Carita Mānasa, Maṅgala Pāṭha*. Śrī Poddhāra Mādala Bhavānī Samiti Guwahāṭī, 1980.
- [Varmā 1987] Rāmagopāla Varmā, *Agrasaurabha*, Shree Agrvāla Samāja, Fatehpur, Shekhawati, 1987.
- [Vidyālaṅkāra 2010] Satyaketu Vidyālaṅkāra, *Agrvāla jāti kā prācīna itihāsa*, Śrī sarasvatī sadana, 2010.

## 英語文献

- [Aikawa 2019] “Marwari Women who Spend their Life with Their Family Deity in Contemporary India-- The Case Study of the Rani Sati Worship --”, *Toyo University Oriental Studies*, No.56, The Institute of Oriental Studies Toyo University, pp.103-124.
- [Aikawa 2020] “Contemporary Satī Worship -- A Case Study of Satī Temples in Shekhawati---”, *Toyo University Oriental Studies*, No.57, The Institute of Oriental Studies Toyo University, pp.122-139.
- [Babb 2004] Babb.L., *Alchemies of Violence: Myths of Identity and the Life of Trade in Western India*. New Delhi: Saga Publications, 2004.
- [Census 1961] *Census of India*, vol4, Government of Publication, 1961.
- [Gazetteer 1984] *Rajasthan State Gazetteer; Jhunjhunum*, Directorate, District Gazetteers, Government of Rajasthan Jaipur, 1984.
- [Hardgrove 2004] Anne Hardgrove, *Community and Public Culture; The Marwaris in Calcutta*. Oxford University Press, 2004.
- [Harlan 1992] Harlan,L., *Religion and Rajput Women: The Ethic of Protection in Contemporary Narratives*. Berkeley: University of California Press, 1992.
- [Harlan 1994] Harlan,L., “Perfection and Devotion: Sati Tradition in Rajasthan” in *Sati The Blessing and the Curse: The Burning of Wives in india* ed, John Stratton Hawley, Oxford University Press. 1994. pp.79-99.
- [Sangari & Vaid 1991] Sangari, K., and S.Vaid, “Institution, Beliefs, Ideologies: Women Immolation in Contemporary Rajasthan” in *Economis and Political Weekly*, vol.26:17, 27 April 1991, pp. WS2-WS 18. New Delhi: Oxford University Press, 2000.
- [Major 2007] Major, Andrea, *Sati A Historical Anthology*. Oxford University Press, 2007.
- [Mani 1998] Lata Mani, *Contentious Traditions: The debate on Sati in colonial India*. University of California Press, 1998.
- [Salminen 2006] Heini Salminen. *Constructing Sati-hood The Image of Rani Sati in a Modern Hagiography*, University of Helsinki Master's Thesis, 2006.
- [Timberg 1978] Thomas Timberg, *The Marwaris: From Traders to Industrialists*. Delhi, Vikas, 1978.

## 日本語文献

- [相川 2015] 相川愛美 「インドにおける「サティ」の観念の現代的再解釈」、『宗教研究』、第89

巻・384号・第3輯75-99頁、2015年。

- [相川 2016a] 相川愛美「ヒンドゥー教文献におけるサティール観の変遷—ヤージュニャヴァルキヤ法典とその注釈書を中心として—」、『東洋大学大学院紀要』第52集、237-251頁、2016年。
- [相川 2016b] 相川愛美「現代インドで生きるヒンドゥー教女性とその氏族女神の関係性—ラーニー・サティール女神信仰を事例として」『東京外国語大学アジア研究リサーチペーパー5』、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業 南アジア研究 東京外国語大学 南アジア研究センター、1-21頁、2016年。
- [小松 2013] 小松久恵「『質実剛健』あるいは『享楽豪奢』—1920-30年代 北インドにおけるナショナリズムとマールワリー・イメージをめぐる—考察」、『現代インド』第3号、131-151頁、2013年。
- [川橋・黒木 2004] 川橋範子・黒木雅子『叢書文化研究4 混在するめぐみ—ポストコロニアル時代の宗教とフェミニズム—』、人文書院、2004年。
- [川橋・小松 2016] 川橋範子・小松加代子（編）『宗教とジェンダーのポリテクス—フェミニスト人類学のまなざし—』、昭和堂、2016年。
- [田中・川橋 2007] 田中雅一・川橋範子（編）『ジェンダーで学ぶ宗教学』、世界思想社、2007年。
- [田中 2014] 田中鉄也『インド人ビジネスマンとヒンドゥー教寺院運営—マールワリーにとっての慈善・喜捨・実利』、風響社、2014年。
- [豊山 2012] 豊山亜紀「『土着の伝統』と『複製の近代』—ハヴェーリー壁画にみる 英領インド期の大衆美術とマールワリー・アイデンティティー—」、『南アジア研究』第24号、56-80頁、2012年。
- [常田 2011] 常田夕美子『ポストコロニアルを生きる—現代インド女性の行為主体性—』、世界思想社、2011。
- [中谷 1995] 中谷純江「インド・ラージャスターン州のラージプート女性の宗教的慣行—ヒンドゥー教女性にとっての自己犠牲の意味—」、『民族学研究』60/1、53-77頁、1995年6月。
- [中谷 2013] 中谷純江「『故郷』への投資—ラージャスターンの商業町と移動商人マールワリー—」、『現代インド』第3号、153-170頁、2013年。
- [松尾 2016] 松尾瑞穂「信じること、あてにすること—インドにおける不妊女性の宗教実践の選択—」、川橋範子・小松加代子（編）『宗教とジェンダーのポリテクス—フェミニスト人類学のまなざし—』、昭和堂、159-190頁、2016年。

キーワード：サティール（寡婦殉死）、ヒンドゥー教、女神信仰、パティヴラター、インド